

じしゅう どうこうさん
時宗 東岡山

福田寺だより

【ホームページもご覧ください!】

<https://kyoto-fukudenji.com/>

～今月のおことば～

一代の聖教の所詮はただ名号なり 『播州法語集』

お釈迦様が一代で説かれた
教えの究極は、名号「南無
阿弥陀仏」に結着する。

救いは行動にある

時宗総本山護持会カレンダーの10月の格言はご覧になったでしょうか。

「救いは行動にある」です。これは一遍上人を敬愛した詩人・坂村真民さんの「行動」という次の詩の一節です。

“救いは行動にある 行動すること 打坐も読経も 行動を伴って しんに生きてくる”
打座とは只管打坐しかんたざのことであり、“ただひたすらに坐禅する”という道元禅師の教えです。読経とは經典を読むことで、つまるところ口に称える念仏と言えるでしょうか。「救い」というのは仏様が救ってくださる、また自らが他者を救う、という両面であると感じます。いずれにせよ思いだけではなく、行動が伴わなければ願いは叶わないということです。

一遍上人は法語の中で、「お釈迦様の教えは最終的に念仏に集約されている。諸々の經典で阿弥陀仏の功德について説かれており、浄土三部經（『無量寿經』、『観無量寿經』、『阿弥陀經』）においても、念仏の教えを明らかにすること、念仏を勧めることが説かれている。このことを知りながら、学問や經典の研究ばかりして念仏を忘れてるのは、他人の財産をむなしく数えるようなものだ。一向に自分の身にはならず、金千両の引換券を持っていても使わないでいるようなものである」と説かれました。もちろん經典をおろそかにしてよいという訳ではなく、理論ばかりで行動が伴わない“頭でっかち”への教訓です。同様に念仏は“極楽浄土行き”の切符に例えられることがあります。切符をせっかく持っていてても列車に乗り込まなければ、救いも何も無いということです。

一遍上人はまさに身体的、行動的な聖でした。口称念仏はもとより、「遊行ゆぎょう」（全国を行脚し布教すること）、「賦算ふさん」（手ずから念仏札を配られること）、「踊り念仏」（念仏救済の喜びを表した踊り）という時宗三大行儀にもすべて通じています。教義云々を頭で「理解する」、「信じる」ということよりも、その場で身体を通して「感じる」ということに重きを置かれたことが分かります。

また、私も人のことを言えた義理はありませんが、心に何かを思っても行動に移せない人は割と多いのではないのでしょうか。あるいは得られた知識だけで満足してお終いということはありませんか。インターネットが発達し、コミュニケーション不足、現代社会だからこそ、知識や言葉だけでなく行動・体験が重要になってくるのだと思います。最近の御朱印巡りや体験型の観光地の流行はこの一端かもしれません。

理屈に縛られず、“まずは一步”と踏み出したいものです。

合掌



ヒガンバナ



シュウメイギク

